

Close Up クローズアップ 交通教育センター

高齢者を対象に動画 KYT を活用した出張研修を静岡県内で展開

交通教育センターレインボー浜名湖（以下、レインボー浜名湖）は静岡県から平成 23 年度より委託を受け、高齢者の運転中の事故防止を目的として、県内の各地に出向いて「動画 KYT（危険予測トレーニング）出張研修」を実施している。昨年度は県内 19 ヲ所 で約 600 名が研修を受講した。動画 KYT は Honda が開発した教育機器。実際の交通状況を再現した CG 動画を見ながら危険を予測し、その過程を受講者同士が振り返りながら話し合うことで危険感受性を高められるようになっていく。

11 月 7 日、裾野市役所で同市内の高齢者を対象に「動画 KYT 出張研修」が開催された。まず、インストラクターから受講者に危険予測ボタンが手渡される。前方のスクリーンにクルマで市街地を走行する動画が流され、受講者は危険を感じた場面でのボタンを押していく（ここでは事故は起きない）。動画が終了すると、ボタンが押された場面を再生しながら、その場面ではどのような危険が考えられるかを受講者同士で討議してもらう。そして、同じ場面で事故にいたってしまう動画を流し、事故の原因と対策を話し合う。また、受講者が危険を感じてボタンを押したタイミングをスクリーンに表示し、事故にいたるかなり前に押している人もいれば、事故が回避できないタイミングで押している人、ボタンを押していない（危険に気づいていない）人もいることをインストラクターが説明。「運転中は目の前の状況をよく観ることに集中して、そこから得られる情報をもとに危険を予測することが大切です」と強調した。

今回の裾野市では、動画 KYT に加え「感情コントロール教育プログラム」による研修も実施された。このプログラムは（公財）国際交通安全学会の平成 21・22 年度研究プロジェクト（※1）により開発された運転中のストレス反応（あせり、イライラなどのネガティブな感情）に起因する事故を防止するための教育法である。レインボー浜名湖をはじめ、Honda の交通教育センターが企業ドライバー向けの安全運転研修に取り入れている。インストラクターが提示する様々な運転場面ごとに感情度（他人への「むかつき度」または時間的プレッシャーによる「あせり度」と運転度（行動）を受講者が自己評価。その後、運転中にネガティブな感情になってしまった時の対応について、受講者同士が意見を交換しながら自分の感情コントロールに適した「セルフトーク」（自分自身にいい聞かせる言葉）を各自がワークシートにまとめ、研修は終了した。

動画 KYT を受講した高齢者からは「『こうしなければいけない』と押しつけられるのではなく、事故を防ぐ運転を自分たちで考え、導き出す点が良かったと思います」「人に迷惑をかけない運転をするためには、常に危険予測を意識することが必要だと感じました」という声が聞かれた。感情コントロールを受講した 60 代の女性は「運転中にイライラする傾向があることをあらためて実感しました。セルフトークを使って、この傾向を変えていこうと思います」と感想を語った。

※1 プロジェクトリーダー：東北工業大学教授 小川和久、メンバー：東北工業大学名誉教授 太田博雄、中京大学教授 向井希宏、（株）レインボーモータースクール 鈴木隆司



市街地を走行する動画を見ながら、どのような危険があるか予測する



危険予測ボタンによって、受講者の危険予測状況を記録する



受講者同士で話し合い、事故を防ぐ運転を導き出す



感情コントロール教育プログラムではインストラクターがネガティブな感情が生み出される原理などを解説する



感情的になり危険な運転行動をとりやすいケースとその対処法を各自がワークシートにまとめる

Safety Report セーフティルポ 子ども

親子に交通安全への理解を深めてもらう Honda の関連企業による周辺地域への活動

11 月 23 日、Honda の部品サプライヤーである八千代工業（株）（本社：埼玉県狭山市）が同社鈴鹿工場亀山事業所（三重県亀山市）で親子交通安全教室を開催した。この教室は子どもには事故の危険や怖さ、保護者には自らが事故を防ぐ知識と子どもの行動特性を理解していただくことを目的としている。今回は同社だけでなく、鈴鹿地区の関連企業も協力した。開催の背景を同社鈴鹿工場管理ブロック技術

主幹 嶋田賢一さんは次のように説明する。「私は昨年、Honda パートナーシップインストラクター（以下、HPI ※2）の認定を受け、積極的に地域の交通安全活動に取り組みたいと考えていました。子どもの交通事故は生活の中で起きます。これを防ぐためには、事故につながる危険が一般生活の中に潜んでいることを地域住民の方や従業員の親子に認識していただく機会が必要だと思い、この教室を当社として初めて開催することにしました。この

ような交通安全活動を社内で定着させ、継続的に実施していきたいと思っています」。嶋田さんは従業員以外の親子にも参加してもらうため、事業所周辺の小学校を通じて告知を行い、親子 52 名が来場した。今回の親子交通安全教室では、嶋田さんをはじめとする HPI によって飛び出し事故の再現などが行われた。30km/h で走行するクルマの前に駐車車両のカゲから人形が飛び出して衝突してしまう過程を見せ、道路を渡る時は必ず止まって右、左、右を観て安全確認をすることの重要性を説明。人形を使ってシートベルトを着用している乗員と非着用の乗員の動きを比較する実験では、クルマに乗ったら全席でシートベルトを着用（チャイルドシートを使用）する必要があることを伝えた。4 歳と 8 歳の子どもと来場した母親は「飛び出し事故の再現が印象に残りました。道路に



HPI が事故防止のポイントを親子に伝えた

飛び出すとどうなるのか、子どもたちにも理解できたと思います」という。また、7 歳の子どもと来場した母親は「子どもが通っている小学校から案内があり、参加しました。運転席から見えない死角の範囲を確認できるなど、大人にも勉強になる内容で参加して良かったと思います」と感想を語った。

※2 Honda の関連企業内で交通安全指導を担うインストラクター。Honda の交通教育センターでの養成研修を受講した関連企業の社員が認定される



左右を確認せずに道路に飛び出したらどうなるか、人形を使って再現



シートベルト非着用の場合、急停止した時に身体が前方に投げ出されることを示す



運転席から見えない死角の範囲を親子で確認してもらう